

特集 中部 自動車リサイクル部品

厳しい人材確保 酷暑が追い打ち



少しでも働きやすい環境

中部地区の自動車リサイクル事業者は、社員が働きやすい環境づくりに力を入れている。猛烈的な暑さが各地を襲う中、リサイクル工場の暑さ対策が求められている。社員の負担を軽減するため、労働時間の短縮や空調の拡充などの動きがみられる。また、今後の業界を担う人材の確保に向けて工場見学やイベント出展などに力を入れる企業も多い。各社はさまざまな工夫を凝らし、自社の成長につなげている。

募る危機感 工夫凝らす社

中部の自動車リサイクル事業者も、使用済み自動車車の確保に奔走している。使用済み自動車の発生台数はここ数年低迷が続いており、車両1台当たりの仕入れ価格も高騰している。中古車オークション(AA)を通じて車両を手に入れている企業が多く、AAでは外国人の買い手との競争が激しくなっている。「仕入れたい車の多くを外国人バイヤーが持っていく」という声が目立つ。

一方、ここに来てそうした状況に変化が見られると話す経営者もいる。愛知県のあるリサイクル企業の社長は「中東情勢の混乱が長期化している影響なのか、外国人バイヤーの動きが例年に比べると静かだ」と話す。「そのため、昨年以上に欲しい車を仕入れることができており」と手応えを示す。中東情勢は不透明な状況が続いており、仕入れ環境が今後どうなるかは注目だ。

各社が頭を悩ませているのは、使用済み車の確保だけでなく、特に厳しい状況に置かれているのが人材確保だ。車両の入手を担う営業職や工場で使用済み車を解体するスタッフの採用に頭を悩ませて

いる企業が多い。愛知県の経営者は「解体の仕事を希望する若い人が非常に少ない」と話し、「これだけ暑い日が続く」と、工場での作業を続ける若者がさらに減るのではないかと危機感を募らせる。

そのため、各社は社員が働きやすい環境づくりに力を入れている。今年の夏は中部各地で最高気温が40度を超える日がみられた。熱中症対策はリサイクル事業者にとっても喫緊の課題だ。カーグリーコマゼン(大園明哉社長、愛知県弥富市)は工場での作業終了時間を1時間繰り上げた。暑い中で作業をする社員の身体的負担を軽減するのが狙いだ。社員からは好評で、業務の成果も上々だという。KMI(伊藤孝雄社長、岐阜県養老町)は社内にきき水機を設置し、工場に働く社員が業務の合間にきき水を食べられるようにした。社員からは涼しさを感じられると好評で、暑さ対策になっている。

少子高齢化で生産年齢人口が減少する中、自動車リサイクル工場に働く人材を確保するのは今後さらに難しくなる可能性がある。吉田商会(吉田泰平社長、愛知県豊橋市)は同市を走る路面電車に自社のラッピング広告を出したり、工場見学を積極的に受け入れたりと、などとして若い人材の採用につなげている。こうした取り組みは今後ますます重要になりそうだ。

中部地区 リサイクル事業者の取り組み

暑さ対策 終業時間を1時間繰り上げ

カーグリーコマゼン(大園明哉社長、愛知県弥富市)は、社員を暑さから守る取り組みに力を入れている。今年の夏からは工場での作業終了時間を1時間繰り上げた。これまでは午後5時までだったが、同4時までに変更した。大園社長は「ヘルメットや軍手を着用しながらの作業となるため、車両関係の現場は特に暑さ対策が求められる」と力を込める。国内向けのリサイクル部品を生産するスタッフについても、水曜日の勤務を午前中のみ



カーグリーコマゼン

とした。また、毎日工場の屋根の下で行っている全社員朝礼の時間も短縮した。最高気温が40度を超える日もあるなど、厳しい暑さが続く中、さまざまな取り組みを通じて社員が快適に働ける環境づくりを進めていく考えだ。

リサイクル部品の販売に対しては、酷暑が追い風となっている。エアコン関係の部品は需要が大きく、同社の売り上げも好調だ。また、「ドアやエンジン」など、エアコン関係以外の部品もよく売れていると手応えを示す。同社が掲



破砕機増設 プラスチック回収に注力



KMI(伊藤孝雄社長、岐阜県養老町)は、使用済み自動車からのプラスチック回収に力を入れている。「車に使われている部品をすべてリサイクルする」との考えが背景にある。今年春には回収したプラスチックの破砕機を増やした。

現在は2台でプラスチックの破砕に取り組んでいる。新車生産における再生材の活用が話題となっており、時流に合った取り組みと言える。破砕機の台数を増やしたことで業務効率が向上した。



は、リサイクル部品に加えて社外部品にも力を入れている。両者を合わせた部品点数は約1万3000点に上る。社外部品の需要は大きく、拡大の傾向にあるという。物価が高企する中、今後も社外品やリサイクル部品の販売に力を入れていく。

工場の暑さ対策も重視

している。スポットクーラーを工場の各所に設置しているほか、今年の夏からはきき水機を設置し、休憩中に食べることでできるようなにした。社員からは大好评で、暑さが落ち着くまでは続ける方針だ。

大学生や障がいのある子どもたちを招いた工場見学も実施している。ニブラを使用した車両解体は特に人気だ。毎年秋に地元で開催されるSDGs(持続可能な開発目標)をテーマにしたイベントにも出展するなど、自動車リサイクルの情報発信にも力を入れている。

海外向けリサイクル部品売り上げ拡大



マーク・コーポレーション

「ゆりかごからゆりかごへ」を理念に、手ばらし解体にこだわるなど高品質な自動車リサイクルを目指すマーク・コーポレーション(向井弘光社長、三重県鈴鹿市)。同社は現在、インターネットを通じて部品の輸出事業に注力している。海外での日本の中古車需要の高まりや、円安の進行で外国人バイヤーからのパーツの引き合いが強まる中、販路を広げることでも収益拡大につなげる狙いだ。

同社は昨年、リサイクル部品の輸出事業を担う「IRP(インターナショナル・リユース・パーツ)部門」を立ち上げた。会宝産業(近藤高行社長、石川県金沢市)の海外向けECサイト「eパーツワールド」を活用し、外国のパイヤーが必要部品を受注生産。1カ月当たり300400点の中古パーツを輸出する。同部門を担当する若田孝生主任は「設立から1年強で売上高は4倍以上になった」と胸を張る。

急成長の秘訣は、現地



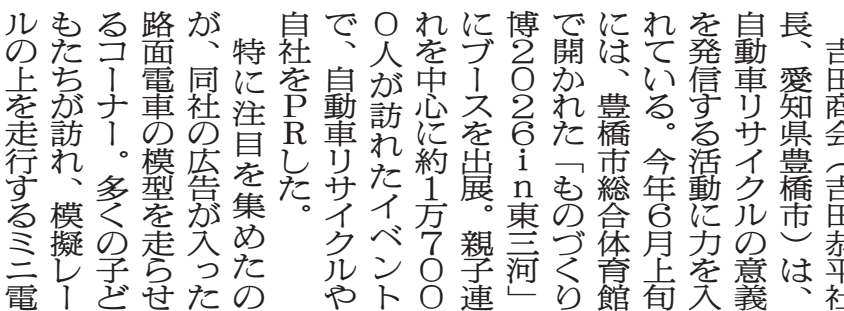
海外向け部品の商品化工程

需要の徹底した分析だ。車両や部品の価格をマイカーや車種ごとに洗い出し、その時々で最適な車両を仕入れて商品化する。加えて、昨夏には輸出に強い県外の事業者を視察し、さまざまなノウハウを吸収したという。

駒田豊(センター長)は「今後も海外からの引き合いは強くなる。事業を成長させ、収益の柱に育てたい」と話している。

イベントなどで自動車リサイクルPR

吉田商会



自動車リサイクルに入るよう、アピールを続けていく」と意気込んでいる。

リサイクルの現場を紹介する活動も積極的に実施している。高校生の工場見学を受け入れ、ニブラを使って使用済み自動車を解体する作業やエアバックの取り外し作業などを紹介している。初めて現場を見る生徒も多く、興味深そうに眺めていた。

主力の国内向けリサイクル部品販売は好調で、売上高も増加傾向にある。今後、成長を続け、自動車リサイクルの認知度向上にも取り組む考えだ。



吉田商会(吉田泰平社長、愛知県豊橋市)は、自動車リサイクルの意義を発信する活動に力を入れている。今年6月上旬には、豊橋市総合体育館で開かれた「ものづくり博2026 in 東三河」にブースを出展。親子連れを中心に約1万7000人が訪れたイベントで、自動車リサイクルや自社をPRした。

特に注目を集めたのが、同社の広告が入った路面電車の模型を走らせるコーナー。多くの子どもたちが訪れ、模擬レーンの上を走行するミニ電

車を楽しそうに眺めていた。同社は市内を走る路面電車にラッピング広告を掲出しており、企業や自動車リサイクルの認知度向上につなげている。今年秋にも市内で開かれる子ども向けイベントに参加する予定だ。吉田社長は「小学生のなりたい職業ランキングの上位に自動車リサイクルが入る」と意気込んでいる。

リサイクルの現場を紹介する活動も積極的に実施している。高校生の工場見学を受け入れ、ニブラを使って使用済み自動車を解体する作業やエアバックの取り外し作業などを紹介している。初めて現場を見る生徒も多く、興味深そうに眺めていた。

主力の国内向けリサイクル部品販売は好調で、売上高も増加傾向にある。今後、成長を続け、自動車リサイクルの認知度向上にも取り組む考えだ。